

イエスを殺す計画 ヨハネによる福音書 11:39-44

1. そこで、祭司長とパリサイ人たちは議会を招集して言った。「われわれは何をしているのか。あの人多くのしるしを行っているというのに。もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」(11:47-48)
 - a. ラザロを蘇生させた奇蹟はイエスを批判する者たちの間では特に感動もなく、むしろこのようなことが続けばすべての人がイエスを信じるようになってしまうと対策が協議された。
 - b. この議会で協議されたことは、イエスが本当にメシヤなのかというようなことではなく、彼らの政治的、宗教的特権がはく奪されないための対策であった。いずれにしても彼らは初めからイエスはメシヤではないという前提で話を進めていたか、あるいはメシヤだと認めていても意図的に神の贖いの計画を阻止しようとしたのであろう(ヨハネ 8:44 でイエスは彼らのことを父である悪魔から出た者だと呼んでいる)。
 - c. 実際ローマ人はすでにユダヤを支配下に置いており、ユダヤ国民はカエザルに税を払っていた。彼らの関心は国民ではなく自分たちの利益であった。イエスは彼らの生活、権力、権威を脅かすことになったので、イエスを殺す計画に至った。
2. しかし、彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは全然何もわかっていない。ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が滅びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。」(11:49-50)
 - a. イエスを殺す理由付けは、モーセの律法違反ということではなく、宗教的、道徳的理由からであった。
 - b. 国民全体が滅びるよりはひとりの人が死ぬほうが理にはかなっているが、この「道徳的」ジレンマはイエスによって国民が奪い取られるという仮定に基づいているということに留意しなければならない。
 - c. 彼らの正当化の理由は偽りの主張による欠陥のあるものであったが、神は彼らが知らないうちにもその思考に働いておられた。私たちの人生の中でも、物事がうまくいかない時、すべてを支配される神に常にゆだねれば神は働きすべてを良きにしてくださる。
3. ところで、このことは彼が自分から言ったのではなくて、その年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるめにも死のうとしておられることを、預言したのである。そこで彼らは、その日から、イエスを殺すための計画を立てた。(11:51-53)
 - a. この時神は働いておられたのでカヤパがこの言葉を発した時力強い油注ぎがあったのであろう。ただ残念なことに、ある人に神が働いても次の瞬間には同じ人にサタンが働くこともある。
 - b. その言葉は真実で力あるものであったが、神を崇め喜ばせるものではなかった。神はイエスが世の犠牲となることを啓示されたが、彼らはそれがイエスが殺されるのは神のご意思だと解釈した。
 - c. 私たちの人生でも、神の声をはっきりと聞きながら適用を間違ってしまうことがある。私たちの内に神が働かれているのに御心がわからない時がある。神を正しく理解するには御心を知ることである。
4. そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをしないで、そこから荒野に近い地方に去り、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。(11:54)
 - a. イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをしなくなった、とはなんと悲しい記述だろうか。これはイエスご自身と弟子たちに必要以上の危険が及ばないように警戒しておられることであるが、イエスを殺そうとする計画はラザロの蘇生以前からあった(ヨハネ 11:8)。
 - b. たとえ私たちの生活の中にはっきりした神のご臨在があっても、もし私たちの心や行いが備わっていないければ神は離れてしまう。イエスが「ユダヤ人たち」を避けたのは、恐れていたからではなく彼らが拒絶したからである。